審査の結果の要旨　　氏名　菊地 大樹

本論文が主要な対象とする「持経者」については、従来、古代の国家仏教組織から外れて仏教の民間化・大衆化に尽力した、「ひじり」の一種としてのみ評価されてきた。本論文は、黒田俊雄氏の提唱した「顕密体制論」が中世仏教理解のパラダイムとなるなかで、打ち捨てられていった分野として持経者に注目し、社会的背景を含めて思想家の系譜をたどる「思想的系譜論」の立場から、持経者の広がりと系譜を描き出した。多様な史料を駆使した著者の作業によって、持経者が「仏教の時代」ともいうべき日本中世の成立期に、重要な役割を果たした社会的存在であったことが、初めて明らかにされた。

「持経者」の原義は「経典を暗誦する者」であり、八巻に及ぶ長大な「法華経」を一字一句余さず記憶し読誦することのできる技能が、古代の国家仏教制度としての得度において、評価の対象となった。しかし、この持経の「行」としての側面が、乞食や山林修行と結びつくことによって、国家制度の枠をはみだした「ひじり」という性格を、持経者に与えることになる。このように、古代から中世への持経者の展開に明瞭な筋道を与えたことが、本論文の第一の功績である（第一部の各論文）。

しかし、持経者はたんなる隠者ではなく、積極的に一般社会との接点を求める者も多くいた。12・13 世紀の交に国家の柱石とされる東大寺の再建を首導した重源は、代表的な持経者であり、同時代に国家の頂点にいた後白河院にも源頼朝にも、持経者としての活動がある。頼朝のブレーンとなった関白九条兼実の周辺にも、智詮や兼実の弟慈円など、重要な持経者が集っていた（『玉葉』）。このように、持経者を中世王権の性格を解く一つの鍵として打ち出したことが、本論文の第二の功績である（第二部第一・二・四章）。

さらに、持経者と念仏者は中世前期においてつねにペアとされる存在であったが、念仏者が戦国時代に巨大な宗教運動を生みだしたのに対して、持経者は中世後期には退潮し、近世にほぼ姿を消してしまう。そのこと自体が、歴史的重要性に比して持経者研究の乏しかった原因であり、本論文がその暗がりに光を当てたことの意味は大きい。しかし、「持経者と念仏者」という表題をもつ第二部第三章においても、念仏者を持経者の一類型とする『元亨釈書』の記事が紹介されるのみで、両者の共通／差異の構造は鮮明でない。また、持経者から転生した宗教的巨人日蓮についても、わずかな言及があるのみである。

以上のように、「中世仏教の原形と展開」のタイトルにふさわしい俯瞰図が描ききれていない点は、今後の研鑽に委ねられているものの、持経者の歴史的意義を古代から中世を通して詳細に解明した研究史上の意義は、充分評価にあたいするものである。よって本委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい業績と判断する。